

第1章

松下幸之助 人生の軌跡

—人生は生きた芝居—



松下幸之助は、パナソニック（旧・松下電器産業）の創業者であり、一代にして世界的企業にまで成長させたその経営手腕は、今もって高く評価され続けています。そして、長年にわたる経営活動の中で得た教訓を後世に伝えるために、膨大な著作や発言記録を残してきました。その人生をあらためて振り返ると、必ずしも幸運に恵まれたわけではなく、むしろ不遇の中から商売人としてのコツをつかみ、人生を切りひらいていった感があります。

本章では、松下幸之助の人生の歩みを振り返り、その人生観を学んでいきたいと思います。

次へ

1

どんな境遇からも
人生は変えられる

恵まれなかった少年時代

生家を離れて

松下幸之助は1894年（明治27年）11月27日、和歌山県海草郡和佐村字千旦ノ木（現・和歌山市禰宜）で誕生しました。実家は江戸時代から続く地主の家。その主人である松下政まさ楠くす・とく枝の8番目に生まれたのが幸之助です。兄が2人に、姉が5人もいました。一家の末っ子として生まれた幸之助は、家族中からかわいがられて育ちました。



生家付近の様子／松下の姓の元になったという大きな松があった

ところが、幸之助が4歳のときに一家の運命は大きく変わってしまいます。幸之助の父・政楠は村会議員を務め、地主としての資産もあったのですが、やがて米の取引に精を出すようになります。いわゆる米相場です。米相場は実物の米の出し入れは行わず、先物取引として米の価格の差によって損得が生じる仕組みとなっていました。つまり、賭博的な要素があるものだったのです。

もとより政楠は利益を期待して取引を始めたのですが、結果は損ばかりを重ね、その結果、先祖伝来の土地も家も、すべて人手に渡さなければならなくなりました。

たび重なる不幸

一家は和歌山市内に転居し、政楠は履物店を始めました。しかし、慣れないこともあって商売はうまくいきません。一家に影を落とす不幸はまだ続きました。幸之助の兄や姉が次々と病を得て、亡くなっていったのです。幸之助が2年生の夏を迎えた頃、政楠は大阪に単身働きに行くという決断をしました。そして、私立大阪盲啞院という目や耳の不自由な子どもたちのための学校の事務員の職を得ました。

幸之助4年生の秋、政楠から「大阪にある知りあいのお店で小僧を探しているの、幸之助を大阪によこしてほしい」という1通の手紙が届きます。幸之助はこの求めに応じるために、小学校を中退せざるをえないことになりました。

1904年（明治37年）11月23日、幸之助は南海電車の紀ノ川駅から旅立つことになりました。手にしているのは、着替えを入れたふろしき包み一つのみ。幸之助の記憶では、見送りについてきた母は、電車に乗る幸之助に何度も気をつけるように声をかけ、最後にはまわりの乗客に「この子は一人で大阪にまいます。あちらへ着けば迎えがきています

が、どうかその途中よろしく頼みます」とお願いをしていたそうです。
これが、幸之助の実業人生の幕開けでした。

うれしかった5銭白銅

松下幸之助は、大阪で宮田火鉢店の小僧となりました。小僧とは「丁稚」とも呼ばれる少年の働き手のことを指し、当時どこの商店にもいて、子守や掃除をするほか、たくさんの雑務をこなしていました。

火鉢店に奉公した幸之助の場合、トクサ（砥草）というざらざらの長い草の茎を使って火鉢を磨く仕上げの作業を担当しましたが、すぐに手がすりむけてしまうほどの難しい仕事だったといえます。当時の奉公生活の厳しさがうかがえます。

小僧とはいえ勤労者だったので、給金としてお金を渡されたことは幼い幸之助にとって衝撃だったようです。当時の給金は5銭白銅の硬貨1枚。和歌山では1厘銭で近所の駄菓子屋でアメ玉を2個買うのを楽しみにしていた幸之助にとって、1厘銭50枚分に当たる5銭白銅の硬貨は大金でした。

幸之助は、91歳のときに新聞記者から「これまでで一番うれしかったことは何ですか？」という質問を受けて、この5銭白銅をもらったときの感激をあげ、「うれしさに母恋しさも忘れ、天にも昇る心持ちだった」と答えています。

その後、火鉢屋が奉公生活3カ月ほどで店をたたむこととなったため、幸之助は船場堺筋淡路町の五代自転車商会に奉公することになりました。自転車店での仕事は、掃除や商品の手入れ、ときには修理のために旋盤も回します。店番もすればお客様先へのお使い、集金も仕事で、休みはほぼなく、朝早くから夜遅くまで、働き尽くしの毎日でした。

店の主人（親方）の五代音吉は、幸之助にとって生涯の恩人となった人物です。根はやさしい人ながら、仕事に関しては厳格だったので、特別お客様への接し方については、幸之助は毎日お辞儀から種々の立ち居振る舞いまで厳しくしつけられました。音吉の商人教育は、幸之助のその後のビジネス人生の土台となるものでした。



五代自転車商会の店主夫人との写真

市電を見て電気の仕事へ

幸之助の転機は15歳の頃、仕事の最中に目にした一つの光景から訪れます。

日頃、自身が走り回っていた大阪市街で、いつのまにか市内の主要道路の真ん中に、2本の軌道が伸びていることに幸之助は気づきました。そして、ある日、大阪の四ツ橋あたりを自転車で走行中、幸之助はその軌道の上を走る市電（路面電車）の姿をはじめて目にするのです。巨大な箱のような市電が大勢の客を乗せて自走していく様子は、幸之助にとって衝撃的でした。そして、ある思いに惹きつけられていくのです。

「文明の利器といえる自転車はますます世に出回るものになるに違い

ない」

事実、五代自転車店の主力商品も高価な舶来物から、次第に値段の安い国産自転車へと移行していました。

しかしながら、人力に頼る自転車に対し、人を疲れさせない電力の可能性はさらに前途洋々ではないか。これからはきっと電気の時代がやってくる一幸之助は「ぜひ電気関係の仕事がしたい」との思いを強くするようになりました。

ちょうど和歌山にいた姉夫婦が大阪に出てきており、幸之助は義理の兄に「電気の仕事に就きたい」という思いを伝え、電気会社へ入社する手助けを依頼しました。ただ、5年半にわたって、自分を育ててくれた主人音吉にはお店を辞めたいという話をどうしても切り出せず、幸之助は、結局、心の中でおわびを繰り返しながら、店を出てからおわびと暇をもらいたい旨の手紙を出したのです。

そして、義兄の援助で、大阪電燈の内線工の入社を志願した幸之助は、1910年（明治43年）10月21日、大阪電燈の幸町営業所内線係に、運よく見習工として入社することができました。

松下幸之助 小僧時代の学び

裕福な家に生まれたはずが、幼い頃から逆境に放り込まれた幸之助。

当の幸之助はどのような心持ちで幼少期から青年期までを送ったのでしょうか。また、彼なりにこの厳しい状況下で商売の何を学んだのでしょうか。

ここでは幸之助の小僧時代のエピソードをひもときつつ考えていきましょう。

エピソード①たばこの買いおき

当時の自転車店には毎日、何十人ものお客が訪れます。中でもなじみのお客は自転車を眺めながら、時折、そばに控えている小僧たちにたばこを買いに行くよう命じるのが常でした。

そんな中で、幸之助は特に気の利く小僧として重宝されるようになります。というのは、幸之助に頼むと、ほかの小僧よりもすぐにたばこを持ってくるのです。それにはからくりがありました。店の近所のたばこ屋では20個入りのケースでたばこを買うと、1個おまけがつくことを幸之助は知っていたのです。そこで、あらかじめ買いおきをしておけば、お客をお待たせしないから、お客は当然喜ぶ。1個おまけの分、自分も儲かる。そういうアイデアを実践していたのです。

「君のところの小僧さん、なかなかえらい子どもやなあ。未はえらくなるやろう」

親方の音吉は、お客から幸之助へのおほめの言葉をいただくほどになりました。

実際、多くのお客は、たばこを買うとなれば、店先の幸之助を見つけて頼むようになり、万事、順調でした。

ところが、しばらくして幸之助は、音吉に呼ばれてこんな